

特集「東アジアの一仏教伝統における学際的視座」

緒言

石井清純

本特集は、2020年2月27日から29日にかけて、パリのコレージュ・ド・フランスおよびソルボンヌ大学を会場として開催された International Conference Song-dynasty Chan : Interdisciplinary Perspectives on an East Asian Buddhist Tradition (宋代禪国際学会—東アジアの一仏教伝統における学際的視座—)における日本側発表者の日本語版原稿をまとめたものである。

この国際学会は、フランスの Centre d'études interdisciplinaires sur le bouddhisme (CEIB 学際仏教研究所) と駒澤大学禪研究所によって開催された。日仏交流の宋代禪の学術大会としては初の試みといえる。発起人は、チャオ・ジャン (張超) 博士 (École Pratique des Hautes Études (EPHE フランス国立高等研究実習院)) である。加えて、ジャン博士が駒澤大学に国費研究員として滞在したことが学会開催の契機となったものであるため、当時の受入教員であった石井清純が、日本側発起人として名を連ねることとなった。とはいえ、実質の運営は、ほぼすべてジャン博士とディディエ・ダヴァン准教授 (国文学研究資料館) の多大なるご尽力によって遂行

された。まずは、この場をかりて、おふたりのご尽力に衷心より感謝申し上げます。

発表者は日本から6名、米国から2名、地元フランスから6名の計14名。中国宋代禅の研究を中心に、その世界的な展開について、韓国・ベトナム・日本の禅から、さらには20世紀の欧米における受容まで、幅広い視点からの発表が連なった。コロナウィルスの世界的蔓延により、厳しい行動規制等が行われる中ではあったが、充実した学術交流が行われ、禅学研究の世界的展開の道標となる会となったといえよう。なお、発表者全員の欧文(フランス語・英語)による論考は、コレージュ・ド・フランスより2021年度に刊行される予定で編集が進められている。

1. 宋代禅学会の意義

開催に当たって目指したところは、ジャン博士の開催趣旨に詳しいが、重複を厭わず日本側参加者としての見解を述べさせていただくこととした。

禅宗は中国の唐代に興り、宋代に大きな発展を遂げて、東アジアの周辺地域に伝播した。東アジア各国で今日なお生きつづけている禅の伝統も、20世紀に日本から欧米に広まったZENも、その直接の源流は宋代禅であった。しかし、その重要度に比べ、宋代禅の研究は、これまでけっして充分であったとはいえない。中国禅宗の研究は20世紀に飛躍的に進歩したが、その主力は敦煌より出土した新出文献を駆使した初期禅宗史の研究と、『祖堂集』を中心とした唐五代の禅宗文献の解説に注がれていた。日本のみならず、フランスでも、かの有名なポール・デミエビルの『ラサの宗論』は前者の、仏訳『臨済録』は後者の分野に属するものといえよう。その中において、今回参加した石井修道駒澤大学名誉教授の『宋代禅宗史の研究』(1987年)は先駆的で重要なものであった。

しかし、20世紀の終わりごろから、宋代禅を中国禅の完成形とする視点が芽生え始めた。日本や中国だけでなく、欧米でも、著書や論文が発表され、若手の研究者たちも、学位論文の主題に宋代以降の禅を選ぶことが多くなってきたのである。

今回の国際学会は、そのような動向を受け、東アジア各地に展開し、今日まで伝わる禅の基盤となった宋代禅の意義を多角的に再評価し、各国の禅宗研究を国際的・学際的に交流せしめることを目的として開催されたも

のである。

2. 学術大会の概要

学術大会は、コレージュ・ド・フランスにおける2日間の研究発表とソルボンヌ大学における読書会というふたつの要素に大別される。以下、時系列に沿ってその内容を紹介させていただく。

(1) 研究発表

学術発表は4部構成となっていた。発表内容は以下の通りである。

初日(2月27日)は、基調講演の後、日本人研究者を中心に現代の宋代禅研究の最先端が紹介された。

<基調講演>

- ・ Jean-Noël ROBERT (ジャン＝ノエル・ロベール: Collège de France 教授)
「宋代禅の普及における釈教歌の役割: 道元の『傘松道詠』と慈円の影響」

ロベール博士の基調講演は、釈教歌と道元に帰せられる『傘松道詠』の関連を分析したものであった。

<第1部>宋代禅の諸相 (1)

- ・ 石井修道 (駒澤大学名誉教授) 「北宋末・南宋初の曹洞宗と臨済宗—『沂州道楷塔銘』の発見をてがかりとして」
- ・ 小川隆 (駒澤大学教授) 「唐代禅から宋代禅へ—馬祖と大慧」

石井名誉教授は宋代禅における黙照禅批判と看話禅の形成について、小川教授は唐代禅の「問答」から宋代禅の「公案」への転換についての発表であった。



<第2部>宋代禪の諸相(2)

- ・土屋太祐(新潟大学教授)「宋代禪宗における看話禪の形成」
- ・柳幹康(花園国際禪学研究所准教授)「教・禪と『宗鏡録』」
- ・Garance Chao ZHAN(ガランス・チャオ・ジャン(張超):フランス国立高等研究実習院(EPHE))「仏法の管理者—宋代禪宗寺院の住持について」
- ・Stéphane FEUILLAS(ステファン・フェイアス:パリ大学教授)「道潜—教外別伝と山水詩の間に」

土屋准教授は「無事」禪を克服して看話禪が生み出された過程について、柳准教授は『宗鏡録』を軸に諸教・諸宗を一元化した宋代以後の仏教について、チャオ・ジャン博士は宋代禪院の住持の職務から見た宋代禪宗の特色について、フェイアス教授は宋代の詩人への禪的思考の影響について語られた。

2日目(2月28日)は、宋代禪の域外展開についての発表が続いた。

<第3部>東アジアにおける宋代禪の文化的変容

- ・Albert WELTER(アルバート・ウェルター:アリゾナ大学教授)「建設実業家としての禪師—杭州地域における宋代の榮西の経験」
- ・Frédéric GIRARD(フレデリック・ジラルール:フランス極東学院(EFEO)名誉教授)「道元における中国の旅の意味」
- ・石井公成(駒澤大学教授)「ベトナムの竹林禪派における王権と自然」(代読)
- ・Yannick BRUNETON(ヤニック・ブルヌトン:パリ大学教授)「宋代禪の韓国の禪伝統の展開に果たした役割—曹溪宗における当代的視点から」

ウェルター教授は榮西の、ジラルール名誉教授は道元の、それぞれの入宋経験の意義について発表された。石井公成教授(代読)は、ベトナム竹林派への、ブルヌトン教授は韓国曹溪宗への展開について紹介された。

<第4部>禪と世界

- ・Pamela WINFIELD(パメラ・ウィンフィールド:イーロン大学教授)「13世紀の曹洞禪に見る中国の物質理論と僧堂施設の影響について」

- ・石井清純(駒澤大学教授)「嗣書と輪番住持制度」
- ・Didier DAVIN (ディディエ・ダヴァン:国文学研究資料館准教授)「宋代禪から20世紀のZENへー西洋の禪の誕生」

ウィンフィールド教授は、『正法眼蔵』と禪院の建築様式に五行思想の影響を見ろというユニークな視点を提示し、石井清純は十方住持制と伽藍相続制を結びつけた輪番住持制の形成を通して、宋代禪の日本の変容について論じた。

むすびはディディエ・ダヴァン准教授による、禪の西洋への展開に関する発表であった。宋代禪が中近世に一度日本化(生活化・日本語化)され、それが20世紀に欧米社会へと展開していった様相が解明され、宋代から現代にいたる禪の流れが締めくくられたのである。

読書会の紹介

3日目はソルボンヌ大学に於いて禅籍の読書会を実施した。ディディエ・ダヴァン氏の紹介文にもあるとおり、一つのテキストを皆が共同で読み進めるという読書会の伝統は、日本独自のもの、欧米や中国では珍しいものらしい。なかには何時間もかけて数行しか進まないこの日本の方式を非効率と



擲揄する西洋の学者もあったと聞く。しかし、日本では禅籍の読解は入矢義高を中心とした会読によって開拓され、今日もそうした会読の中からこそ新しい研究が生まれ出されている。この企画は、その方式をフランスの研究者に体験してもらおうという試みであった。具体的には現在、東京大東洋文化研究所の班研究S-3「中国禅宗語録の研究」として、東京で月1回開催されている禅籍の会読をそのまま彼の地で実演する形であった。

題材は『大慧武庫』の一節。幹事の土屋准教授の作成した詳細な資料をもとに、多数の語録や随筆の記述をクロスオーバーさせながら一字一句の含意を吟味する作業に、現地の研究者や院生がたいへん興味を持ち、総勢13人で熱心な議論が交わされたのは、学術交流としての新たな成果とい

えるであろう。



同日午後は、フランス国立図書館でペリオ本の敦煌写本を直接参観する機会も得ることができた。実に1926年、胡適がここで神会の文献を発見し、そこから近代的禅宗史研究が始まったのである。我々は100年近く前に禅宗史という学問が始まった場に立ち会ったような感激を覚えた。

禅は現在、フランスに限らず、欧米から注目を集めている。それは文化的学術的な興味だけではなく、精神的な実践としても受容されている。しかし、その交流は、決して盛んとはいえない。欧米各国において、研究者も参禅者も多く情報を求めている。それと同時に、欧米の禅研究者たちも、いまや日本の研究者にとって無視することのできない成果を発表し始めている。これからの禅研究に東西の学術交流は、ますます重要度を増してくることは確実といえよう。今回の禅研究所年報特集号では、日本側発表者の原稿のみを収録する形となったが、先述したように、発表者全員の論考が、コレージュ・ド・フランス・ライブラリーより刊行される予定で編集が進んでいる。このような洋の東西で連携した試みが、今後の禅研究の世界的展開を促進する布石の一つとなってくれることを願っている。